

北京日本学研究中心

通 讯

《 第 4 2 号 》

责任编辑：清水展 吴咏梅

邮政编码：100081 Tel : 8424893 1994.11.30

简 讯

- ◇10月26日(三)：本“中心”专家及家属10人左右参加了北京外国语大学外事处举办的外事活动，参观了北京近郊房山县的一个新型村庄—韩村河村。
- ◇10月31日(三)～11月4日(五)：竹内实主任教授和徐一平副主任前往上海、苏州、杭州作招生宣传。两位先生在复旦大学、苏州大学和杭州大学分别作了学术演讲报告和介绍“中心”的说明会。
- ◇11月1日(二)下午：社会研究室举行第5次研究会。今井清一先生作了题为「天皇制和政治体制：围绕丸山教授的学说」的报告。
- ◇11月2日(三)下午：第3次文学·文化研究会召开，秦刚和郭伟两先生分别发表了自己的硕士论文。
- ◇11月9日(三)下午：“中心”第四任日方主任教授佐藤保先生访问了“中心”。
- ◇11月14日(一)下午：京都大学教授本山美彦应“中心”邀请来作特别学术讲演。报告的题目为「从日本的经验来看中国的入关问题」，此次演讲深受学生的好评。
- ◇11月15日(二)：国际交流基金日本学中心情报处理课的横堀先生访问了“中心”，视察了各图书阅览室和图书资料部。
- ◇11月16日(三)上午：“中心”召集了客座研究员与其研究协助者的第一次碰头会。中日双方人员分别作了自我介绍，并报告了各自研究课题的题目及研究进展的情况。
下午：日本文学·文化研究会举行了第4次研究会。由浅野纯一先生和吴怀中先生对竹内实主任教授的论著《日本人眼中的中国》中的「难民的思想」一节作了发表。
- ◇11月18日(五)下午：十周年纪念活动筹委会召开第3次会议，对预算进行了讨论，另外还决定了研讨会日程安排等具体内容。
- ◇11月20日(日)：“中心”副教授周维宏应国际交流基金邀请赴日，他将作为访问学者在常磐大学进行为期一年的共同研究。
- ◇11月21日(一)下午：第6次社会研究会举行，客座研究员高淑娟发表了题为「多元价值观和日本的战后经济」的报告。
下午：语言研究会也在二层接待室开展活动。小松寿雄先生作了「日语中重视听者的

倾向「日语变化的原因」的报告。

◇11月22日(二)下午：日本女性问题研究会开展第三次活动，伊藤贤次先生以「日本女性的就业问题—特别是1970年以后—」为题作了报告。

北京机场三天两夜之游 一代之以自我介绍一

竹内信夫

在攻读博士的学生时代，因碰上好机遇得到了法国政府的奖学金，所以以前曾有过的至少要坐一次西伯利亚铁路的想法得以实现了，我坐上了火车，铁路旅行一直到了巴黎。仅坐火车的时间就有九天。从哈巴罗夫斯克到莫斯科连续坐了六天时间，感觉就象在火车上生活一般。这是我的第一次海外旅行。

在月台的真中央就是东柏林和西柏林分界线的弗里德里奇·斯特拉塞车站，我被强迫赶下车来，在地下审讯室接受盘问，被平安释放后坐上了最后一趟电车于夜半时分到达措·葛尔特恩(动物园的意思)。若按原定计划，一觉醒来就应该到美丽的巴黎。结果我却被撂在了一个人影稀疏的陌生车站的黑暗过道上。即使在这样的深夜(呀，正因为是半夜的缘故吧)，也有好心肠的人，一直把我带到车站出口处，指着眼前的道路告诉我说，沿着这条路稍微再走一段就有深夜也营业的饭店。好歹到了那儿，等到房间得以确保之时，总算真正地松了一口气。其时大概是深夜二点左右。

当我提出有无吃饭的地方这一不合理问题时，得到的是一敷衍的答复，即：去车站那儿看看，也许会有。我心想：来的时候可是什么也没看见呀。即便这样想，还是抱着半分的希望再次向车站走去。结果没能找到吃的东西，却在回来的路上被一个女人叫住了。当时由于我内心的一种“把你的所有手段都使出来吧！”的情绪很高涨，所以心动了，可是转念觉得“旅行支票恐怕不行吧”，于是拒绝了。拒是拒绝了，可还是站着聊了一会儿天。女人则不再答理我了。

此后，虽然不能说逛遍了全世界，但到各地旅游的机会亦不算少，一般的事情都应算经历过。因而来到北京后，我做梦也没想到在经历一次在机场停泊了三天两夜、而便当和旅馆都由航空公司提供的“豪华旅行”。当然，这也是预想外的日程安排。不由让人想起蒙田的名言“我知道些什么呢”(Que saia-je?)。

为此五台山之行泡汤了，不过倒也体验了许多有意思的事儿。首先是对中国人各种情形的对应。发了次火以示愤怒，便当什么的一上来就暂且安静一会儿，最终并没有表现得自己是多么地受困。一直和他们相处到第三天的傍晚，空气紧张的仅是头一天。象修学旅行一样，又是打扑克又是聊天，真的就是在北京机场旅行的心情。除了一部分机场职员(为数极少的一部分)外，大都很热情，尤其是从大连来的程先生和北京、海南来的两位李先生，他们对我如同亲人一般，很亲切地照顾我。

成果亦非浅。由于多次重复听同一件事，机场的广播开始能听懂了。我很高兴，向北京的李先生咨询听到的城市名，学习了中国的地理。语言呢，重复练习还是相当重要的。因为转遍了机场的每个角落，所以我想以后不会在机场迷路了。电话·厕所的位置、飞行情况告示板的方位、失物招领处、受理机票取消的窗口，等等，连不必知道的情况我都了解得一清二楚。这也可算是获得的成果之一吧。

最大的成果在特别接待厅的21号房间。我想另外一间22号房也是同样性质的大厅。和VIP室不一样（原来是用作团体候机室的吧？）。第三天的傍晚，我们（已经不得不让人注意到我们这些人的存在了）对那天第四次的飞机晚点情报再也忍无可忍了，这次进行了一次已经许久没搞过的有组织的集体抗议。其结果被带至这间21号室。这是一间除了大型画面的录象装置外就别无他物的房间，在这儿让我们看了一部由福建省音像公司制作的叫做《赌王神技》的武没劲的电影。虽有免费便当招待，却出现了一大拨旅游“离队者”。很遗憾，我亦是其中之一，所以以后的情况就不清楚了。大概，不，肯定旅游又至少持续了一晚。

教训。在中国，这种场合的移动指示通常是突然地并且在人预想不到的时候下达。没有必要因为迟到而慌张。只要不是自己这边逃脱，对方总能把您找到。第二个教训即是尽量不要离开群体。

以上虽然简略，即是我在北京机场的三天两夜之旅的情况报告。我想看了这个以后，大家多少能判断一下我是怎样一个人物了吧？至于如何判断，那就是各位的自由了。我只是想让大家了解一下把“代之以自我介绍”作为副标题的原由。

桂 林 行

西垣 勤

桂林之风光美，一直被赞誉为四大绝景，即：山水之秀、江水之清、岩洞之奇、石林之美这4绝。唐代的柳宗元称这儿的山水为“不惊远，不陵危，环山回江，四出如一，夸奇兢秀，咸不相让”。也就是说即使不祈望高远的地方、不临近危险之处、无论绕山还是顺流，到处都能观赏到争奇夺秀、不相上下的美景。引句是我从温少瑛影集中阳太阳先生所作的序言中摘录下来的，这几句实在说得太妙了。

因北京的浓雾而大大延期到达桂林的第二天，我坐上了可容百人左右的游览船，开始直下漓江。确实前方、左右都能看到重峦迭嶂的群山，大家所熟知的尖三角形的山脉，一会儿钻入云霄，一会儿又迫在眉睫间。河边也有山，但并不多。河边多是河原、草原，孩子们在那上面玩耍，水牛在幽闲地吃着青草，女人们在洗衣服，不时还能看见背后他们悠悠生活着的村庄。这些情景的正中央，丰富而又清冽的河水在静静地流淌着。河中泛着以鸬捕鱼的小渔舟、捞取河藻的小木筏。漓江下游长达80公里的周围，有着人们悠然自得而又真实的生活。而且这种生活还充满着中国这个国家将来如何变化与我无关的风情。好几次我对米仓夫

妇嘟囔道：“这儿可是桃花源般的地方，能否在此住上一年？”不必说米仓夫妇自然是呈现了一种你是不可能的表情。

桂林的街道看上去很干净，生活亦很充裕。导游唤作高翠凤，长得很美，日语也相当好。和她一起度过的那几天很愉快。向大家推荐小高和桂林之游是否多此一举了？

桂林之漓江美景

米仓 严

初冬，晚霞般初冬的霞光……
幻觉般的暑气笼罩了我的目光，
船侧，峡谷如影随形
其形其色，千变万幻，忽远忽近
缭乱了的，我的眼
虽是自然之界，确又超乎自然
或者，
我已身处梦幻之景？

センター通信

(第42号)

責任編集：清水展 吳咏梅

郵便番号：100081

Tel：8424893

1994. 11. 30

ニュース

- ◇10月26日(水)：北京外国語大学外事処の主催によるモデル農村見学があり、専家の先生およびご家族が10人あまり参加して、北京郊外、房山県にある新興村の韓村河村を訪問した。
- ◇10月31日(水)～11月4日(金)：竹内実主任教授と徐一平副主任が、学生の募集宣伝のために上海、蘇州、杭州を回られた。両先生は復旦大学、蘇州大学、杭州大学において学術報告会とセンター紹介の説明会を行った。
- ◇11月1日(火)午後：社会研究室は第5回目の研究会を開催した。今井清一先生が「天王制と政治体制：丸山教授の所論をめぐって」というテーマで報告をされた。
- ◇11月2日(水)午後：第3回目の文学・文化研究会が開かれ、秦剛先生と郭偉先生がそれぞれ修士論文の発表をした。
- ◇11月9日(水)：第4期日本側主任教授の佐藤保先生がセンターを訪問された。
- ◇11月14日(月)午後：京都大学教授の本山美彦先生を招いて特別学術講演会を催した。「日本の経験から見た中国のガット加盟問題」と題するこの講演は大好評を博した。
- ◇11月15日(火)：国際交流基金日本学センター情報処理課の横堀先生がセンターを訪問し、各図書室や図書資料部を視察した。
- ◇11月16日(水)午前：第1回目の客員研究員とその研究協力者との打ち合わせ会議が開かれ、中日双方の研究員がそれぞれ自己紹介をし、各自の研究領域やテーマおよび研究の進行状況について簡単な報告をおこなった。
—— 午後：第4回目の文学・文化研究会が開催され、浅野純一先生と吳懷中先生が、竹内実先生の著書『日本人にとっての中国像』のなかの一節「難民の思想」についての批評と討議をした。
- ◇11月18日(金)午後：十周年記念活動準備委員会の第3回目の会議が開かれた。全体の予算やシンポジウムの日程などについて議論し、具体的な内容を決定した。
- ◇11月20日(日)：当センター助教授の周維宏先生が国際交流基金の招請研究者として、常盤大学で1年間の研究をするために出発した。
- ◇11月21日(月)午後：第6回目の社会研究会が行われ、客員研究員高淑娟先生が「多元価値観と日本の戦後経済」というテーマで発表がされた。
—— 午後：言語研究会が開かれ、小松泰雄先生が「日本語における聞き手重視の傾向－日本語変遷の要因－」というテーマで報告をされた。
- ◇11月22日(火)午後：女性問題研究会は第3回目の活動を行った。伊藤賢次先生が「日本における女性の就職問題－特に1970年代以降－」と題する講演をされた。

北京空港2泊3日のツアー：自己紹介に代えて

竹内 信夫

大学院博士の学生の時、うまい具合にフランス政府の奨学金を貰えたので、以前から一度はと思っていたシベリア鉄道に乗って、パリまで鉄道旅行をした。列車に乗っていた時間だけでも9日間。ハバロフスクからモスクワまでは6日間ずっと乗り続け、列車のなかで生活した感じだった。それが初めての海外旅行だった。

プラットフォームの真ん中を東ベルリンと西ベルリンの境界線が走るフリードリッヒ=シュトラッセ駅で強制的に下車させられ、地下の取調室で尋問を受け、無事赦免されて最終電車で真夜中の西ベルリンのツォオ=ガルテンに降りた。目が覚めたらパリ。というすばらしいセッティングのはずが、人影もまばらな見知らぬ駅の暗い通路に立つことになってしまった。こんな夜中でも（いや夜中だからこそか）親切な人がいて、駅の出口まで連れて行き、目の前の道を指して、これをしばらく行くと夜中でもやっているホテルがあるから、と教えてくれた。とにかくそこまで辿り着き、部屋を確保できたときには、正直、ホッとした。夜中の2時ころだったと思う。

食べるところはないか、という無理な質問に駅の方に行けば何かあるかも、といういいかげんな返事。来る途中何も見なかったぞ、と思ったが、半分自棄でもう一度駅に向かう。結局、食べ物にはありつけなかったが、掃り道、女に声をかけられた。矢でも鉄砲でも持って来い、という高揚した気分だったので心は動いたが、トラヴェラーズチェックではだめだろうなと思って断った。断ったが、しばらく立ち話をした。女の方があきれていた。

以来、全世界というわけにはいかないが方々に旅行する機会も少なくなき、たいていのことは体験済みのはずだった。だから、北京に来て、空港の中を2泊3日の、弁当とホテルは航空会社持ちという豪華な旅行をすることになろうとは夢にも思っていなかった。もちろん、これも予定外の日程ではあったが。モンテニユの「我、何をか知る」(Que sais-je?)を思い出させられた。

そういうわけで五台山には行きそこねたが、いろいろ面白い体験をした。まず、中国人の状況に対する対応。一応怒ってみせるが、弁当などが出るとしばらく静かになるし、結局のところそんなに困った風をみせない。3日目の夕方までつきあったのだが、とげとげしい空気になったのは初日だけ。修学旅行風にトランプとおしゃべりで本当に北京空港ツアーの気分だった。一部の空港職員を除けば（ごく一部だが）皆親切で、特に大連から来た程さん、北京と海南から来た2人の李さんは、親身になって世話をやいてくれた。

成果もあった。何度も繰り返して同じことを聞くので、空港のアナウンスがわかるようになった。嬉しくて、聞き取れた都市名を北京の李さんに尋ねては、中国の地理の勉強をした。語学はやはり繰り返し練習が大切です。隅々まで歩き回ったので、もう北京空港で迷うこともないと思う。電話やトイレの位置、フライト情報が掲示される場所、遺失物係、キャンセル受付などの窓口、などなど、知らなくてもよいことまで一杯知ってしまった。これも成果の一つに数えてもよいだろう。

極めつけは、特別接待ホール21号室である。もう一つ22号室も同じ属性のホールだと思う。VIP室とは違う（本来の用途は団体待合室か）。3日目の夕方、その日4度目の遅延情報に、我々（既にここに「我々」が生まれつつあったことには注目しておかなければならない）も堪忍袋の緒が切れそうになって、久しぶりの、今度は統制のとれた、集団的プロテストを試みた。その結果、連れて行かれたのがこの21号室なのである。何のことはない、大型画面のビデオ装置があるだけの部屋なのだが、そこで福建省音像公司製作の「賭王神技」というロクでもない映画を見せられた。弁当のサービスもあったのだが、ここで大量のツアー脱落者が出てしまった。小生も残念ながらその一人なので、それ以後のことはわからない。多分、ツアーはもう一晩続いたに違いない。

教訓。中国では、こういう場合の移動の指示は、突然に、たいていは予期せぬ時に行われる。しかし、遅れたからといって慌てる必要もない。こちらが逃げ出すのでないかぎり、向こうが必ず捜し出してくれる。二つ目の教訓。できるだけ群れを離れないこと。

以上、疎略ながら北京空港2泊3日の旅の報告である。これをお読みいただければ、小生がどのような人間であるのかいささかの判断材料にもなると思う。どのように判断するかは、それぞれの方のご自由である。ただ、それが「自己紹介に代えて」と副題した所以であることだけご承知おきくださればよい。

桂林に行く

西垣 勤

桂林の風光の美は、山水の秀、江水の清、岩洞の奇、石の美という四絶、四つの絶景として称賛されて来たという。また、唐代の柳宗元は、ここの山水は、「不驚遠、不陵危、環山回江、四出如一、誇奇競秀、咸不相讓」、つまり高遠なことを望まず、危険に近寄らず、山をめぐり、河をさかのぼり、どこでも同じように、奇を誇り、秀を競い、いずれも相譲らない、と賞したという。何のことはない、温少瑛の写真集の、陽太陽氏の序言の孫引きだが、実にうまい事を言うものである。

漓江下りは、北京の霧で大幅に遅れて着いた翌日、百人ばかり乗せる観光船に乗って始まった。確かに前方、左右に、重畳するご存じの鋭い三角錐の山々が、霞に込められてあり、あるいは目睫の間にあるのだが、それは河のそばにもあるが、そう多くなく、川端は、多く河原、草原で、子供が遊び、水牛が草を食べ、女の人達が布をたたく洗濯をされていて、その背後にはのんびりと生活しているような集落も時々見える。その真中を、清冽な水が、豊かに、ゆっくりと流れているのである。川中には、鵜で魚を捕る筏が浮かび、河の藻を取る筏が浮いている。つまりこの漓江の八〇キロに及ぶ河下りの周辺は、のんびりとした、しかしまぎれもない人々の生活があるのだ。そしてその生活は、中国の国家がどうなろうと関係ないという風情を持っている。米倉さん夫妻に、何度か、ここは桃源郷のような所で、一年くらい暮らせないかなあとつぶやいた。米倉さん夫妻は貴方にできる訳はないだろという表情をしていたのは無論だが。

桂林の町も、清潔で豊かな暮らしに見えた。ガイドさんは高翠鳳さんと言って、なかなかの美人で日本語もうまく、この人との数日で、これも楽しかった。皆さんに、高さんとの桂林の旅游を是非とお勧めするのは蛇足か。

桂林の漓江景

米倉 巖

初秋 晩夏のような初冬の光……。
かげろうの幻覚に包容されたぼくの眼に
山水映の影は船の進行に平衡して
形を変え 色彩をかえ 遠く近く浮きつつ めくるめく。
自然を越えた自然の境界——。
あれは夢幻の空間であったのだろうか。